

創作はいつも、鍵となる一つのイメージから始まる。小さな思いつきはどんなプロセスを経て作品の形になっていくのか。作り手たちのそんなひらめきの庭を覗いてみたい。

“
 デイケア利用者、障害を持つ人、美術作家——
 それぞれが垣根を超えて作り出した、ひとつの空間。
 色とりどりの蝶や花は、一人ひとりの生命のよう”

作品 『光の天使と出会う』

- 制作期間 約5カ月
- 着想のきっかけ
患者や医療スタッフの癒しや治療に、アートの力を取り入れる



びょういんあーとぶろじえくと病院などの療養施設にアート作品を展示すること、またアートを通して患者や利用者と交流することを目的に2008年に発足。現在は21名の美術作家やデザイナーなどが企画・制作に携わる。これまで札幌ライラック病院、天使病院、北海道がんセンターなどで計12回の展覧会を開催。メンバーは會田千夏、石垣伯江、石垣わか、伊藤幸子、上嶋秀俊、上嶋ミカ、栄口真子、小川豊、小山めぐみ、佐藤綾香、佐藤隆之、柴田紀恵、瀬川葉子、高橋佳乃子、鄭英姫、中丸大輔、日野間尋子、藤山由香、山田恭代美、吉田恭子、井上始子(敬称略)。写真は作家提供。



今にも動き出しそうな躍動感。壁だけでなく天井や部屋のプレートなどにも蝶々が止まる。

1.札幌ライラック病院ではほぼ毎年展示が行われ、患者や利用者、職員たちからも親しまれている。2.柱にもカラフルな蝶が。下絵は、富良野の障害者支援施設の利用者たちが描いたもの。そこから刺激を受けたプロジェクトの一員で美術家である佐藤隆之さんが一枚ずつ蝶の形に切った。3.一枚一枚再現されたタンポポの花びらは見事。4.蝶々は廊下へとび出し、職員専用の出入り口まで続いていく。5.搬入時の様子。膨大な数の作品を、エリア毎に担当を決めて展示していった。6.同病院のデイケアで行われた、花の制作風景。(写真5・6は作家・病院提供)



【制作協力】
 詩人・美術評論家 柴橋伴夫
 市立札幌病院緩和ケア内科 小田浩之
 社会福祉法人富良野あさひ郷 北の峯学園
 札幌医療生活協同組合 札幌南青洲病院ボランティアグループ「せら」
 医療法人北志会札幌ライラック病院 通所リハビリテーション利用者の皆さん
 北海道大学大学院国際広報メディア観光学院 加藤康子

＜開催中の展示＞ 「光の天使と出会う」

開催中～7月31日(月) 12:00～18:00 無料
 医療法人 光志会 札幌ライラック病院 1階待合室と通路(札幌市豊平区豊平6条8丁目2-18)
 ※観賞の際は、病院利用者へご配慮をお願いいたします。

展覧会
 情報

色とりどりの花や蝶が集まるとは散り、時に重なり、どこまでも広がっていく。春の風景を見ているかのような気分になり、遠い春の日を思い出したり、心が安らいだり……。ここは豊平区にある札幌ライラック病院の総合待合室。花や蝶は入口で訪問者を迎え、総合受付で咲き乱れ、奥の廊下へと続いていく。病院独特の緊張感の漂う空間が、展示によってパッと明るくなったかのようだ。

紙で作られた1000個の蝶や花が空間を彩る「光の天使と出会う」。制作したのは、今年で発足10年目を迎える「びょういんあーとぶろじえくと」だ。

「アートも医療も、人間の営みには必ず関わるもの。漠然とはありますが、その2つに近いものを感じていたんです」と語るのは、プロジェクトの代表であり、発起人の美術家・日野間尋子さん。2004年、オーストリアのザルツブルクにあるギャラリーを併設する病院を訪れた。そこで大きな感銘を受け、札幌の病院にもアートを届けたいとプロジェクトを発足し、仲間と共に活動を始めた。「始めて間もないころは、邪魔だとか必要ないという意見もありました。でも継続して活動することで、病院との信頼関係や理解が深まっていったのだ

と思います」と振り返る。

今回の展示で驚いたのは、作品の設置場所だ。総合受付や待合室など、様々な人が出入りする場所のみならず、レントゲン室や物品庫、手術室、不潔庫など、限られた人しか利用しない廊下まで作品が続いていた。

「照明も控えめですし、ここまですべて設置しても良いのかという迷いは当初ありました。しかしそんな場所だからこそアートが必要なんじゃないか、照明が当たらない場所には作品があってもいいじゃないかと、迷いを振り切ったんです」

時には身体に障害を持つ人も加わり作品を制作する。今回も、当病院のデイケア利用者や富良野の障害者支援施設の利用者、他の病院のボランティアグループなど多くの人が制作に加わり、その人数は100名を超える。

「技術のある人がつくる美術作品や彫刻作品だけではなく、自分と他者がつながり、社会全体へつながっていくための活動や取り組みもアートだと捉えています。だから、私たちは誰もがアート活動においては対等でありたいんです」

蝶々や花びらは、似ているようでそれぞれ違う。「一人ひとりの存在だと思ってます」という日野間さんの言葉が印象的だった。